
刻の風見鶏

恋夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刻の風見鶏

【Zコード】

Z3445V

【作者名】

恋夢

【あらすじ】

あと五分で、地球が消滅するんだってさ。かつたるいなー。俺、死ぬのか…。でも、この俺はなんと、地球が消滅する五分前にタイムトラベルしてしまった。そこで出合ったのは、どこかで見かけたことのある少女だった。

『 五分後に、地球が消滅します。皆さん、落ち着いて聞いてください、五分後に地球が消滅します、全ての生物が死にます、もちろん我々も死にます』

それは、真夜中にやつてきた。

さつきまでは、くだらないニュースをテレビで流していたはずなのに。

それなのに、今テレビでは、とてもじゃないが信じられないことを放送している。

『 みつ皆さん落ち着いてください！例え世界が滅びようとも、我々がこのまま、生き続けることができるよう』と…』

落ち着くのはお前が先だぞ、アナウンサー。
テレビの前の俺の方がよっぽど落ち着いている。

「意味、分かんねー…」

取り敢えず…と書いてはなんだが、カツラーメンをつくる俺。三分でできるカツラーメン、これを食べ終わる頃には、世界が消滅してるってことか？

…信じられない、よなあ。

だいたい、普通は、『あと一週間で世界が消滅します』とか言つ
んじやないのか？

あと五分、つて、短すぎるだろ。

もし一週間ほど猶予があつたのなら、好きなことをたくさんして
暮らせるけど、あと五分しかないなら何もできない。
ただ、地球が滅びるのを待つだけ……か……。

こうこうとき漫画だと、科学者やら何やらが出てきて、地球の危
機を救つてくれるのだが……現実ではそう上手くいかないよな。

「で、俺達にどうしろと言つんだ」

全く。

無責任な世界だ。

長谷川航、といつのが、俺の名前だ。

つい先ほどまでは、普通の高校三年生だつた。

それが今では、悲劇の高校三年生。

…と言つても、俺以外の人間も皆、悲劇の主人公なのだが。

ちらつと時計を見ると、「11：58」となつていた。

確か、さつきのあの、「世界方滅」ニュースが流れたのは五十六
分。

つつことは、十一時一分に、俺の人生終了つつことか？

…微妙。

「あと三分で、俺に何をしろ?...?」

たった三分では、彼女さえ作れない。
残念なことに俺には彼女が居ない。
いや、俺がモテないのではなくて、俺の周りには趣味の悪い女しか居ないのだ。

「好きです」「なーんて告白されたことも何度はあったが...」
遠い昔の話だ。

「さてと、カツラーメンでも食べるか

ちょうど今、三分たった。

それはつまり、地球滅亡まであと一分と二分ほど。

「いい加減な世界だよなあ、全く」

俺が言える」とじやないけどな。

そのとき、ホール音が部屋に鳴り響いた。

……誰だあ?

こんな夜遅くに。

つづーか世界滅亡する直前に。

ゆづくと立つて、俺は受話器を取った。

「はー、もしもーし。長谷川ですけど」

『もーしもーしかめよー、かあめわあんよーつと』

「……ま、

はあ?

かめがどうしたんだ。

つづーか頭おかしい、『ドイツ。

「アンタ誰？」

『おおれえはじゅいあんー・ペんざくむりのじゅうたんだあー』

「……」

ダメだ、日本語が通じていない。

というか電話をかける相手を間違えているだらう。
あり得ない。

「で、どうぞ用件だ？」

『今日は世界が終わるんだぞー。だからお前とアツコさんの関係も
おしまいだー。ザマアミヤガレー！つへつへつへ、おれはアツコさ
んにかたおもいしてたんだ、バカタレが。気付けよ、ケンタロウ』

残念ながら、俺にはアツコさんとこう彼女は居ないし、ケンタロ
ウでもない。

お前の気持ちに気づけるはずがないのだ。
そして今分かったこと。

『ドイツ、酒飲んでるな。

『おれがあ、アツコさんを、つぱりてやりたかつたんだぞーーなの
にケンタロウ、おめえがアツコさんを……つ。つ、ち、くしょーー！
！おれは、おれはあ……つ』

『ハイハイ、すこませんでしたねえ、じゅ』

音を立てて電話を切る。
つるせえ男だ、全く。

それにしても、地球最後の日の電話が、間違い電話だとは…。
せめて最後くらい、「好きです」の電話が欲しいものだ。

つて、おいで。

また電話鳴つてゐるし。

さつきの男じやないだらうなあ？

少し警戒しながら、俺は受話器を持つ。

「…」じちりひちりひちり。どちら様だ？

『あ、あのつ、こんばんはつ！－長谷川、わた、わた、るつ、さん
のねがででりますか！』

やけにどもりがちな声が聞こえてくる。
これは、さつきの男じやない…？？

「さうだけど？」

『す、好きですつ－－』

……ッ、あた……！

待つてました、告白！

若干声が野太いような気がするが、今はそんなことを気にしては
いられない！

「ま、馬路かつ」

『ま、ま馬路ですつ－－んな“俺”で良ければ、最後の時を一緒
に過ごしませんかつ』

……聞き間違いだらうか。

今、“俺”って聞こえたような…。

「君、」

『つはい！』

「男か」

『はい！』

俺は無言で会話を終了する。

受話器をぽーんと投げ捨てて、ため息をつく。

なんだって、こんなときにホモに好かれちまつんぢやんのか。

俺つて不運だ。

「どーでもいいけどな、もっ」

あと少しだ。

あと少しで、世界が終わる。

「だけど、せめて…」

せめて、愛する人と寄り添いながら、世界と共に滅んでいきたかった。

…なーんて、今更思つてもしようがないんだけどな。

そんな、平和な地球滅亡までの時間。

それを破壊したのは、一人の少女だった。

最初の異変は、鐘の音だった。

普段ならば、俺の住むアパートの隣にある、どでかい時計塔の鐘は閉鎖されているので鳴らない。

それなのに、今日は。

今日だけは。

何故だか。

十二時を知らせるために。

鐘が鳴ったのだ。

辺りに響き渡る大きな音。

それはまるで、世界の破滅を知らせていくようだ。

この鐘の音が十二回もあるのだと思うと、心底嫌になった。

このとき俺は、いつもは鳴らない鐘が鳴っているという違和感にまるでとけ込んでいて、それが通常のよう構えていた。
もうすぐ世界が終わるから、という余裕もあつたのかもしれない。

これで五回目。

あと七回で終わる。

そのときだつた。

一人の少女が、"落ちる"の見たのは。

「……ツ、」

ふと窓をのぞいただけだつた。

耳障りな時計塔を見ただけだつた。

それなのに、俺の目には、あの娘が映つてしまつたのだ。

夜空を華麗に落ちる少女。

黒い髪を一つに結つて、白いネグリジエを風になびかせ。
落ちる少女。

後々冷静に考えてみると、その少女は、落ちるにしてはゆっくり

すぐる速度だったのだが、そんなことを今考えられる余裕はなかつた。

その少女が落ちてこむとこいつただけが、俺の頭の中を占領していたからだ。

そして俺は、情けないこと、どうすることもできなかつた。

叫ぶことも、助けることも、何も。

ただただ、落ちる少女を見るだけ。

見守るなんてものじゃない。

ただ、"見ていた"のだ。

何でことはない。

幻覚だ。

地球が滅亡する」と、多少ながらもショックを受けた俺の、華麗な幻覚だ。

そうでなかつたら何なのだ。

これは現実で、実際にあつた出来事だつたとしても、俺は信じない。

信じない。

信じられるはずがないから。

だが、俺自身がそう思つていても、動搖は抑えられなかつた。

もし……もしもだが、仮に……仮に、だぞ？

これが……"現実だとするならば"。

そうすると……あの少女は何故落ちているのだろうか。いや、飛んでいるのかも。

……それはないか、下に落下しているのだから。

ざわめく心。

落ち着かない好奇心。
騒ぎ立てられる恐怖。

全ての感覚が、俺を、動かそつとしていた。

鐘の音が聞こえる。

あと少しで、今日が終わる。
それと同時に、明日が始まつて、そして、一瞬で明日が
つま
り世界が 終わるのだろう。

もう既に、鐘の音が何回目かなんて数えていなかつた。
俺の目には、あの少女しか映つていない。

どうする。

いや、どうしたい、俺。

答えは一つだ。

どうせ死ぬなら 世界が破滅して俺の人生が終わつてしまつ
ならば 俺は、自分のやりたいことをやりたい。

目を堅く瞑る。

行け。

行くなら今だ。
今しかない。

行けるものなら行つてみる。

ああ、行つてやるつじやねえか！

アパートのぼろい窓枠に体全体を乗せる。

みしつという鈍い音が響いたが、多少の損害は気にする余地もな

い。

ここは八階で、 “飛び降りる” には最適の場所だな。

最後に少女の姿を確認する。

未だに落下している少女には、少しも怖がる様子がなかった。なら。

俺にだつて。

場所は時計塔のすぐ隣、最適ポイント。なら。

俺にだつて。

落ちのりができるはず。

そして俺は、落ちた。

勢いをつけて。

落下 といつよりは、空中浮遊に近い状態なのかもしれない。何せ、落ちる速度が遅い。

遅すぎる。

今思えば、あの異常な速度は、時間の歪みから来たものなのだろう。

だが、あのときはただただ、驚くことしかできなかつた。

ふと、少女の方を見てみる。

すると、俺より低い位置を落ちている少女の姿が目に映つた。

良かつた、居た。

これで消えてたりしたら、ホラーだ。

少し安心しながら見つめていると、その少女と目があつた。

年は十歳から十一歳くらいか。

小学校高学年程度だろう。

俺の恋愛対象にぎりぎり入っていない。

別に口利コンじゃないからな。

安心しりよ少女。

その少女は、俺を見て、一瞬驚いたような表情になつたが、すぐに無表情に変わった。

なんだ？

感情の薄い餓鬼だ。

そのときだった。

俺を、強い衝撃が襲つたのは。

それが何かは分からない。

だが、ただ一つ分かるのは。

俺を、気絶させる程の破壊力を持っていたということだ。

ひつして俺は、意識を手放した。

そして目が覚めると。

そこは。

地球でした。

「つて、そりゃさうだろ

いつてー…。

ここ…俺の部屋か？

……いや、違う。

いくら俺が掃除をサボっていたからと行って、これまで何回も積もっていなかつたはずだ。

だとすると、ここは……？

そのとき、倒れていた俺を、誰かの影が覆った。

誰だ？

視線を少し上にのぞらすと、そこには、見覚えのある少女が居た。

Scene-2 (前書き)

「 それで、君は何者?」

顔を真一文字に結び、無表情で突つ立つて立っている少女。
…せめて反応をしてくれないだろ? うか。
…ひらがむなしくなつてへる。

「 じゃあ、質問を変えるが。君、名前は?」

これまた無表情の少女。
畜生、また反応なしか。
無表情にも程があるのでないか。
さすがの俺も少し傷つく。

「 …まーいこや。俺の名前は、航。長谷川航だ」

少女はまだ無表情。
口を開けじつともしない。
この子は、しゃべれないのだろ? うか、それとも、しゃべらないの
だろ? うか。
微妙なところだ。

「 あー…君、しゃべれないのか? それとも、しゃべらないのか?」

無言の沈黙。

…気まずい、な。
やめよ、この話は。

仕方がないので、少女をじっと観察してみる。
漆黒の瞳。
まだ幼い顔つき。
…やはりそうだ。
間違いない。
この子は、

わざと落ちた少女だ。

「君、わざと落ちていたよね」

今まで無反応だった少女の肩が、びくっと震える。
通りで、見覚えがあると思った。

この少女は、つい先ほどまで、落ちていたはずだ。

「俺、見てたんだけど、」

あやふやだった記憶が、徐々にはっきりしてくる。
…そうだ。
確かに俺は見た。
この少女が、時計塔から落ちるところを。
…といつか、空中浮遊…とでも言つたのだからつか。

「落ちた、よな

今度は確認系。

少女が、視線を下に垂らしながら、ゆっくりと頷いた。

やつぱつ。

自分から言い出したことだが、実際に頷かれると、少し動搖が走る。

「うーん、俺ってやっぱり一般人だ。

物語の登場人物達は、こうこうとき、『そつか…やはりな、俺の思つたとおりだ』とか格好良きめてるのにな。

「君、しゃべれるの?..」

今度はふるふると首を振る少女。

うん、こちらの言葉は通じていい、というか聞こえていいらしい。

だけど、しゃべれないというのは…結構難題だな…。

俺が頭をフル回転させていると、少女がゆっくりと、人差し指を地面につけた。

「一体何を…?..?

じつとその少女の指を見つめていると、その指が床にするすると文字を書き始めた。

どうやら、「永遠」と書いたらしい。

エイエン…?..?

何がだ…?..?

俺が首をかしげて、『わかりません』の意を示すと、少女は次に、「トワ」と書いた。

「ああ、HイHンじやなくて、トワって読むのか

」くぐりと頷く少女。

やつぱつとHイHンじやなくて、トワって読むのができるようになつてきた。

「永遠って、君の名前？」

また頷く少女。
うん、素直だ。

「「」は何処？」

質問を変えてみると、
すると、永遠はさつきと同じように、床に指をつけ、文字をかい
た。

書いた文字は、「時計塔」。

とけいとう…ああ、永遠が飛び降りた、あの時計塔のことか。

「「」、時計塔の内部ってことか？」

永遠が、ゆづくと頷いた。

…「…」。

何故、俺は「」に居るのだろうか。

さつきまで俺は落ちていた。

それなのに。

今、飛び降りた場所と同じ高さの場所に戻ってきてる。
何故だ。

下に降りて上に戻つてくるなどと云うことが科学的にあり得るの
か。

「何で…、「

駄目だ。

今考えると混乱する。

何も考えるな…考へてはいけない、駄目だ…。

そう思えば思つ程、俺の頭は意志とは逆に働き出す。

「何で、俺は…」

そこまで言いかけて、ハツと意識を取り戻す俺。

…そうだ。

もう一つ疑問がある。

この疑問を解決しないことには、何も 何一つ、はじまらないし終わらないのだ。

「永遠…世界は…地球は、滅んでいないのか…?」

勢い付けて永遠に詰め寄ると、永遠が少し困ったような表情になつた。

「どうなんだ…?教えてくれ…頼む、教えてくれ…!」

世界が滅んでいないのなら。
地球が滅んでいないのなら。
まだ、希望はあるはずだから。
だから、頼むから。

こう言つてくれ。

『それは、ただの悪い夢なんだよ

だが、現実は思つた通りにはいかない。

床に人差し指をつけ、文字を書き出す永遠。
今度のは単語ではなく文章だ。

一回書いて貰つただけでは、さすがの俺にもわからない。
五回ほど永遠が文字を書き、漸く俺はそれを解読した。
ただし、その文章の意味を理解するのに、数秒時間がかかったの
だが。

永遠は、「地球は五分後に滅びる」と書いたのだ。

「う……嘘だろ……」

だつて、つこさつき、「五分後」は終わつたはずだ。
それなのに、何で。

“どうしてまた、五分後が現れた”？

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ……」これが現実だと……あり得ない、あり得ない、
あり得ねえ……！」

俺は、永遠の肩を掴んでゆらゆらと揺さぶる。
永遠は、表情も変えずに揺さぶられる。

「夢だ！夢だろ！？そりなんだろ、永遠！……」

首を左右に振る永遠。

……畜生……ッ、嘘でもいいから……例え嘘でもいいから、頷いてくれ
よ……つ。

「おいつなんとか言えよつおい、永遠！

どうせならば。

地球なんか、滅んだ方が良かつたのに。

地球と共に俺も滅んで。

人類もろとも、全員死んじまつて。

そーゆーのつて、現実世界で言うハッピーホームだよな。

今という時代を楽しく生きているヤツにとっては、樂しいまま人生が終わるという最高の終わり方。

今という時代を辛いと思っているヤツにとっては、これで辛いことから解放されるという樂な終わり方。

それなのに。

なのにどうして、俺は生き残ってしまったのだろうか。

「… なあ、永遠…」

生き残ることが、こんなに辛いことだつたなんて知らなかつた。死ぬことが、どれだけ楽なことなのかなんて知らなかつた。

俺は今、たぶん、死にたいと思っているんだ。

「俺…、」

もし。

永遠の言つてこなことが正しことなるならば。

「たぶんさあ、」

きっと、俺はタイムトラベルしてしまつたのだ。

五分前に。

そして何故時計塔に居るのかは分からぬが。

「楽に死にたかったんだよ、今思つとせ」

永遠の肩を掴んでいた手を放す。

不思議そこの目で俺を見つめる永遠

あたくわお

俺なんかのことを、そんなに信用するなよ。
もしかしたら、俺つてば悪い人かもしねないのにさ。

「俺つて、最低だよなー」

自分で分かつてる。

俺が、運命から逃げようとしていること。

永遠を追いかけて、窓から飛び出したあのときから、俺の運命は変えられないものとなっていたのに。

とへ考へてせ、あのどきの行動は俺の意志からだ

そして俺は、自分で背負つた運命からも、逃げようとしているのだ。

「最低だナゾ、二ヶ、俺なんだよ

永遠が、
一歩俺から離れる。

… そうだよ、軽蔑してくれて結構だ。

それが正しい反応だよ、永遠

そのときだつた。

永遠が、俺に回し蹴りをしたのは。

「…、て…！」

な、何しやがんだ！！

腰に痛みが走る。

永遠、お前…つ、

俺がジロッと睨めば、永遠は指を床につけ、文字を書き出した。睨むのをやめ、その指を見つめる。

永遠が書いたのは、

「最低で何が悪い」

だつた。

「何つて…、悪いじゃねえか、全部」

次は頬に、鋭く鉄拳が下される。

…容赦ないな、お前。

俺があきれてものも言えないでいると、永遠がまた何か文字を書いた。

「悪いと思つワタルの心が駄目」

三度ほど繰り返し書いてもらつて、よつやく理解した。

…ああ。

「コイツは俺を、励まそつとしてるんだ。

まだちびつこいくせに。

ちびつこいくせに…、それなのに…。

俺は、こんな年頃の娘に、励まされようとしているのだ。

「…悪かつたよ、永遠。…いや違うか…、俺が悪くなかった。うん、そうだ。悪くない。最低じゃないよ。死にたいって思うのは、人間の心理だよ。俺が悪いわけじゃない」

「ぐーぐーうなずく永遠。

そのきらきらと光る瞳が、俺にはまぶしすぎて。

思わず目をそらしてしまつた。

「…だって、俺みたいな人間には、永遠の純粹な視線なんて…まあ
しくて痛いぜ。」

「なあ永遠、俺達…これからどうなるんだろう？」

永遠が、ゆっくりと首をかしげた。

さて。

まず最初にすべきことは、おそらく……現状確認、だらうな。

「なあ、永遠。この世界は、あと五分で消滅するんだろ？」

素直につなずく永遠。

といふことは、だ。

俺が倒れて、起きるまでに最低でも一分はかかったとして、それで、永遠と話してて一分くらい経つたとする。

あと一分くらいで、この世界は終わるというわけ、だよな。

「……つーことは、俺も楽に死ねるというわけか」

平凡な人間が通常の死に方を望んで何が悪い。

さつきの永遠の回し蹴り事件から、俺はすっかり開き直っていた。

だがしかし、運命とは不思議なもので、“平凡な人間”に“通常の死に方”では死なさせてくれないようだった。

あと少しだ。

あと少しで、俺は、通常の死に方で死ねる……。

死ぬことを楽しみにしている自分がここに居る。

それは開き直つたあとでも、やはり微妙な違和感が残つていて。

そのときだつた。

永遠が、急にすっくと立ち上がつたのは。

「ツ、と、永遠！？」ビリしたんだ、急に……」

ぎゅっと俺の手をつかむ永遠。

な、何だ！？

頬がカアッと赤くなるのが自分でも分かつてしまつた。

いやいやいや、俺、こんな餓鬼に何を……。

「なあ、永遠、座ろうぜ？」「うー、」

俺の手をつかんでいない方の永遠の腕が、ぴしつと、とある方向を指した。

それは、時計塔の階段。

…階段が、どうかしたのか？

永遠が俺の手をつかんだまま歩き出す。

それも早足に。

つられて俺も歩き出す。

つて、おい、永遠！

どこへ向かう気なんだよ、お前は。

焦る俺とは裏腹に、永遠は意志を曲げずこ、早足で階段へと歩いている。

「永遠、止まれっ、永遠っ、」

俺の顔さえ見ずに、階段へと顔を向けたまま歩き出す永遠。

階段に何かあるのか？

それを俺に知らせようとしている？

でも、何故そんなことが、俺の隣にいた永遠に分かる。
もし永遠にわかるのならば、俺にもわかつたはず。
それとも、永遠には不思議な能力があるとか……？
……そんな馬鹿な。

「何がしたいんだっ、」

永遠。

聞いてくれ。

頼むからっ、

「永遠っ！！」

ぴたりと止まる永遠の足。

よかつたとほつとするのもつかの間だ。
俺は徐々に現実に気づいていく。

俺達は既に、階段の前に来ていた。

階段は螺旋階段になっている。

時計塔の外側にあって、段と段の隙間から見えているものは、小さな家々。

高所恐怖症ではないが、この高さだとかなり怖いな。

「……なあ永遠。ここで俺に何をしようと、」

目の前の景色がガラリと変わる。

九十度…いや、百八十度ほど世界がまわる。

…え、これ、どうなってんの。

何？

俺：何が起こった？

さつきまで、俺の目に映っていた時計塔の中の景色。それが一瞬で消えて、真っ暗闇の空が俺の目に映る。綺麗だけど、問題は残念ながらそれじゃない。

今問題なのは、どうして空が俺の目に映っているのかといふことだ。

「ヒツ…、」

情けないことこ、俺の喉から声にならない悲鳴があがる。だつて考えて見てくれよ。

俺の下には何もない。

さつきまで俺の上には空があつたけど、今ではその空も見えやしない。

といふことは、俺は完全に空に向かって、

落ちてこる、訳だ。

目を瞑ろうとするけれど、そんな余裕はなかつた。

なんで俺は落ちてこる…？

それは…それは、永遠が俺を突き落としたからだ。螺旋階段から、空中へと。

なんで突き落としたかなんてわからない。

知るわけない。

永遠の心を全て読めるなんて思つてないし、そもそもつい五分前に知り合つたばかりの永遠の心を読めといつ方に無理がある。

…女心はフクザツだつて言つしな。

つていつか、今そんなことを考へてる場合じやないだろ。

俺は凄い勢いで落下してこる。

どんどんどんどん下に落ちてこる。

それもそうだ。

だつて地球には重力といつものがあつて…つて、だからこんな話をしている場合じやないつ一つの。

「うおああああああ、」

俺、永遠に何かしたか！？

そりや、ハつ当たりはしちやつたけど許してくれたんじやなかつたのか！？

あーつたく、これだから女は…ツ！

そのとき、俺の視界に、白い肌が映つた。

は……つ、？

「ととと、ヒ、わつ、…」

風が口に入つてきて上手くしゃべれない。でも、俺は賢明に声を出した。

だつて、永遠が俺の隣に居たのだから。

まあ、落下していいる時点で隣と云うのはおかしいけれど…。

とにかく、何故だか分からぬが、永遠も落下しているのだ。

俺と同じよつこ。たゞひよつこ。

といつことは、永遠は俺を突き落とした後に、自分も落ちた…つてことか？

地球最後の日だから心中しようとした…そつこいつことなのか？

でも、小学生くらいの女の子がそんな大層なことを考えつくはずがないよな。

…永遠なら考えつくかもしけねえが。

「あんで、おま、えつ、」

どうしてお前はここに居る。

確かに、あのまま時計塔の中に居ても俺達は死んでいただりつ。地球が滅びるのだから。

それと同時に人類も、他の生物たちも滅びていいくのだから。

だが、何故落下する必要がある？

俺も永遠も。

何故落ちている？

ふと、思いついたことがある。

そういうえば、最初に永遠を見たときも、永遠は時計塔から落ちていたな。

そして、俺も永遠の後を追いかけて飛び降りた。で、気づけば…タイムトラベルしていた訳だ。五分前に。

どうせなら、一ヶ月前くらいにタイムトラベルすれば良かった。
そうしたら、その一ヶ月間の猶予くらいは、遊んで暮らしたのに
な。

彼女つくつて、デートして、友達に自慢して。
他にもいろいろやり残したことがある。

バイクの免許が欲しかった。

遊園地の絶叫マシンにも乗ってみたかった。
高くて手が出せなかつた本を買いたかった。
初恋のあの子に会いたかった。
仲のいいダチとつるんで小旅行にも出かけたかった。

今思い起こすと、俺の人生つて、まだまだ穴だらけだ。
完璧なんかとはほど遠いような人生。
こんな人生を、そう簡単に終わらせていいのだろうか。

穴だらけでもいい。

でも、その穴だらけの人生を、もつともつと紡いでいきたかった
のに。

俺の人生は、まだまだ果てしなく続くはずだつたのに。

「死にたく、なあああああああああああああいいつ、」

大声で叫ぶ。

死にたくなかつた。

人生を紡ぎ続けたかつた。

だけどサヨナラ。

俺の未来の彼女、サヨナラ。

俺のドアチ、あばよ。

そして永遠。

たった五分間だったけど、ありがとう。

俺は、空中を落としているはずの永遠を見た。
すると、永遠と曰が合つ。

そして、永遠が笑つた。

俺はその笑顔に釘付けになる。
こんな笑顔、あの五分間では一度も見させてくれなかつた。
こいつ……、こんなふうに笑えたのか。

今までずっと、感情の薄い奴だと思つていたけど。
それつて違うんだな。

お前つて本当は……きちんと笑えるんだな。

俺は、顔の筋肉に力をこめた。

そして、思いっきり口角をあげる。

さあ、笑え。

人生最後の大舞台だ。

笑え、笑え、笑え。

最上級の笑顔を見せつけてやれ。

「永遠一つ、さんきゅーーー！」

最後だけは躊躇まずに言えた。

よかつた。

これで心残りは何もない……こともないが。

俺は目を閉じる。

さよなら、俺の世界。

そして、俺の耳に大きな爆発音が聞こえた。
それと同時に爆風も。

こうして俺は、地球と共に死んでいった

はずだった。

で。

なんで。

どうして。

何故。

疑問符が俺の頭を駆けめぐる。

意味が分からなかつたからだ。
何故だ。

どうしてだ。

何が、起こつた…？

「なんで、

なんでも、俺は生きているんだ…？

…いや、喜ばべきことなのだらうナビ。

さつき、あそこまで格好を付けた俺としては……なんで死んでないんだ？って思うのも当然だと思つ。

「……つそうだ……。永遠！永遠、居るかーー？」

俺が目を開けるとそこは、さつきと同じ時計塔の中。

一瞬、ホントに夢を見ているのだと思つてしまつたくらいだ。

「永遠ーーつー！」

ひょこつと、螺旋階段から顔を出す永遠。

「居、た……。」

俺の体から力が抜けていくのが分かる。

よかつた……。

つて、これは安堵していいのか？？

あーーくそ、もう何を喜んでいいのか分からなくなつてきた。

「よかつた、生きてたんだな、永遠」

こくりと頷く永遠。

その表情は、さつき見た笑顔とは違ひ無表情に戻つてゐる。
なんか虚しいな、俺。

苦笑しながら永遠を見つめると、永遠が床に指をつけた。

何かを伝えたがつてゐる……？

そう思つた俺は、永遠の指先をじつと見つめる。

永遠は、指でこう書いた。

「また五分前に来た」

「……また、か

じつやう。

じつやう神様は、俺達を楽には死なせてくれなさうだった。

やれやれ、だ。

何で俺達ばかりが、五分前に飛ばされてしまうのだろうか。

しかも律儀に、毎回時計塔の中らしこ。

…まさか、ずっと飛ばされ続ける…なんてことは、ないだろ？

「なあ永遠。なんで俺達、また五分前に居るんだ？」

顔を右に傾ける永遠。
分からないうことか。

神様は俺達に何をして欲しいんだか。

もし、地球が滅ぶのを食い止めて欲しいとかいう話なら、五分前
じゃなくて、一時間前くらいに飛ばして欲しい。

そもそも、神様に出来ないことを俺達にやらせるなっていう話だ
けどな。

「あー…っくそ。わっかんねーなあ、この五分間で何ができるって
いうんだよ、全く」

こうしている間にも、五分間は徐々に過ぎ去っていく。
そりそろ一分経つただろうか。

そのとき俺は、永遠に聞くべきことを思いだした。

「そりだ永遠。お前……なんで俺を突き落とした?」

あのとや。

俺は永遠に突き落とされて、時計塔から真っ逆さまに地面へと向かっていった。

その途中で、タイムトラベルしてしまった訳だが。

もしかしたら、永遠が俺を突き落とさなかつたら、俺は今この五分間に居なかつたかもしけないのだ。

何故永遠は俺を突き落としたのだろうか。

それも、何の迷いもなく。

普通、たつた数分だとしても、自分と関わった人間を殺めるのは、多少なりとも迷いがあるはずだ。

今回の場合は、殺すというのとは少し違うが。

まあ、同じようなものだとして、永遠は、少しも迷わなかつた。

この年で。

俺の推定だと、永遠は多く見積もつても中学生。

高校生ではないだろう。

はつきり言えば小学校高学年。

そんな子供が……迷うことなく人を殺すことができるだろうか。いくら現代が恐ろしいからとはいえ、それはさすがにできないのではないだろうか。

それに、これは個人的な意見だが……永遠は、そんなことをするような奴じやない。

「あのときはお前は、なんの迷いもなかつたよな

むづくつと、攻めるよりではなく、ただただ問いかかるような雰囲氣で。

それでも永遠は黙つた。

今までも喋ることはなかつたが、今度は、完全に俺とのゲームにケーションを断ち切つたとこつ感じだ。

まるで、 “ そのことには触れるな ” とでも言つたのよつて。

「 なあ。もしかしてあのとお… 永遠は、俺を 、 、

“ 殺そうとした ” ？

その質問はあまりに恐ろしそうで。

結局口に出すことはできない。

だつてもし、永遠が自然な顔をして頷いたら… ？

背筋がゾクリと寒氣立つ。

… 俺は狂つてしまつたのかな。

永遠がそんなことをするはずない。出来るはずがないじゃないか。

俺は、永遠を信じてこるはずなの。

「 …… 」「 めん 」

ごめん。

一瞬でも、永遠を信じ切れなくてごめん。

「めん。

不思議そうに俺を見つめる永遠。
分からぬならそれでいいんだ。
でも、もし…もし、気づいてしまったとしたら。
さつきの俺の挙動不審な態度に、少しでも不安を感じてしまった
としたら。

過去はもう取り戻せない。
そんなことは分かってる。
たとえタイムトラベルしたって、過去は過去なんだ。
過去が今に変わる、それはきっとあり得ない。
だって俺の隣には永遠が居る。

そして俺は、その永遠を疑つた。

「…「めん…「めん、めん…」、

永遠に向かつて謝り続ける俺。
涙は出ないけど、でも、俺の胸はきつと締め付けられていた。

そのときだ。

永遠が俺に近づいてきたのは。

回し蹴りの件もあつてか、俺の体は半歩後ろへ下がる。
…ま、まさか次は平手打ちされるんじや…?
謝罪までもが止まってしまう。

永遠…今のお前、怖いよ…

ゆづくと永遠の手が上がる。

平手打ちが来る……っ！

俺は、頬に痛みが来ると予想して、ぎゅっと目を閉じた。

すると 予想していた痛みは来なくて、俺の頭に暖かい感覚が
降ってきた。

…え、

「と、わ…？」

視線を上に上げると、永遠の細い腕があった。
永遠の手が、わしゃわしゃと俺の髪を撫でる。
こしょばゆいのと、少し恥ずかしいのとで、俺は永遠の手から
逃げるよろよろと頭を傾けた。

「な、何すんだよ、」

いい年してなでなでとか。

恥ずかしいにも程がある。

そう思つて永遠を見ると、暖かい視線で返された。

永遠が俺よりも年上に見えた。

なんとか知らないけど…、凄く、大人っぽく思えた。

永遠の暖かい視線。

それが俺を包み込む。

…どうして俺は年下の女の子になでなでされても喜ばないつづけの

「俺は別に、なでな…つてか、頭撫でられても喜ばないつづけの

なでなでという言葉を口に出すのまさすがに抵抗がある。

軽く永遠を睨むと、ちょっと笑つて済ませてしまつた。

…くそ、なんか悔しい。

何となくもやもやして、俺がむすりと黙ると、永遠が急に立ち上がりつた。

それも真剣な眼差しで。

「え…、永遠、どうした?」

きゅっと俺の手を握る永遠。

突然の出来事についていけない俺。
なんでそんな、積極的に…、

「おわっ!—」

永遠が俺の手を握つたまま歩き出した。
それに引きずられ、俺も歩き出す。

こんなことが、前にもあつたよつた…そつだ…、永遠に突き落
とされたあのときも…。

ハツとして、足に力をこめる。

これ以上、永遠の思い通りにさせてたまるか…!
あんな恐怖を、一度と味わいたくないしな。

ふと永遠を見上げる。

すると永遠は、少し寂しそうな目で俺を見ていた。

「な…ん、だよ…」

少したじろぐ。

その隙をついて、永遠は俺の背中に体当たりをしてきた。

「うわあっー？」

今度は螺旋階段ではなく、時計塔の展望台から突き落とされた。
用意周到に、硝子は既に割つてある。

・普通展望台の硝子なんて割れる訳ないだろ……。

永遠、お前ホント恐ろしいな。

さすがに落卜するのが二度田になると、少し慣れがやつてくる。
まあいいよな。

どうせ死んじまうんだし。

気楽に行こう。

死にたくはないけど……もつと永遠と話したかつたけど。

そこまで考えて、俺はそんなことを考えている自分に困惑った。
永遠と話したい……？

いやいや、これに変な意味はないだろ、うん。

……あり得ないあり得ない。

自分の考えを、首を激しく振つて吹き飛ばす。

よつともよつて、こんな餓鬼に……あり得ないだろ。

ふと隣を見ると またかよ 永遠が居た。
もちろん、永遠も落ちている。

「永遠つ、お前また俺を突き落として……！何すんだよー。」

勢いで永遠に怒鳴ると、永遠は、まるで俺を見下すかのように笑

う。

な…なんて嫌味な笑い方するんだコイツは…。
誰かの歯ぎしきの音が聞こえてくる、誰だこりんなとおこ…と思つたら俺が歯ぎしきをしているのだった。

小さな女の子のちよつとした悪戯（もちろん、“ちよつとした”にも限度があるが）ここまでムキになつていて自分が恥ずかしい。

「…あと、何分で世界が終わるんだ？」

敢えて永遠がわからないような質問を訪ねてみると、
すると、永遠はニヤリと笑つて、指で五と示した。

…はんつ。

五分な訳ないだろう。

何故つて俺がトラベルしたのは五分前で、今はそのときよりもだいぶ時間が経つていいはずなのだから。

「違うよ、五分前じゃない。そんな嘘に騙されねえぞ、俺は」

今度は俺が、永遠を見下すように笑つ。
すると永遠は、まるで、引っかかったヒドも言つみつこの方の口角をクイッとあげた。

な…なんだよ…。

そのとき、俺は気づいた。

永遠は、五分と示していたんじゃない。

あいつは、…“五秒”と示していたんだ。

案の定、俺が気づいたすぐ後に凄まじい強風が襲ってきた。

今までと同じく、俺はそこで意識を失う。

だが一つだけ、今までと違うことがあった。

…というか、俺が今まで気づかなかつただけなのかも知れないが。今回は、この田でしかと見たのだ。

俺がこの田で見たもの、それは、

永遠が…、俺の意識が途切れる数秒前に、一瞬だけ、何かを叫ぶところだつた。

強風のせいで、何を叫んでいたのかは聞き取れなかつたが。

いつもして俺は、胸に違和感を抱えたまま、意識を手放していった。

それからも俺達は、何度も五分前にタイムトラベルした。

五分前、次も五分前、その次も五分前、そしてそのまた次も…と言つたふうに。

もう何度トラベルしたのか分からぬ程だ。

タイムトラベルして分かつたことがいくつかある。

まず一つ、永遠が、俺を毎回突き落とすといつことだ。

しかも毎回場所が違う。

螺旋階段を少し下つたところから突き落とすこともあれば、とても小さな窓から、無理矢理押し込んで突き落とすこともあつた。

それと、落下するときに、螺旋階段の手すりや展望台の硝子などが、全て綺麗さっぱり消えているといつとも驚きの一つだ。

次に一つ、やはり、永遠は毎回落下するたびに、何かを叫んでいるということ。

何を叫んでいるのかは未だに分からぬが、とにかく何かを必死に俺に伝えようとしているのは間違いない。

それなのに、タイムトラベルしてから永遠に、『何を伝えたいんだ?』と聞くと、困ったように肩をくめるのだ。

次に一つ、落下は、タイムトラベルに関係しているらしい。落下するたびに俺達は、時計塔といつ決まった場所にタイムトラベルしてしまった。

生きてこるとこいつはいいのだろうが…少し複雑である。

最後に一つ、これが一番重要なのが…なんとなく、永遠の表情が硬くなっている気がする。

気のせいかもしれないが、なんだか、最初に出会ったときよりも、元気がなくなっている。

元から無表情なのは仕方ないが、前はもう少し…表情にゆとりがあつたのに。

落下するときも、永遠はあざけ笑つたり、花が開くように微笑んだり…なかなかに表情豊かだった。

それが今では、落下している最中も、何かを考え込んでいるかのような表情だけ。

このことが、目下俺の一番の悩みの種である。

そのとき、俺の肩を何かがつんつん、とついた。

ぱっと振り向くと、そこには思い詰めた表情の永遠が。

「どうした?」

右手の人差し指を綺麗にのばし、展望台を指さす永遠。

なんとなく。

本当に“なんとなく”という直感でしかないのだが、俺はこう思つた。

きっとこれが、最後の“五分前”なのだ、と。

Scene - 4 (後書き)

最後なら最後でいいんだ。

必死でそう思おうとしている自分がいることに気がついて、俺は少し焦る。

何でだ。

何で俺は、そんなことに必死になつている?

もつと普通に、何にも興味がないように思えますなの。それなのに、俺はまるで真実を隠そうとしているかのように必死だ。

「永遠。もうすぐお別れ…なんだろ?」

俺の声まで情けなくなつていて。

調子狂うなあ、つたぐ。

首をかしげる永遠。

無表情で首をかしげると、なんか怖いぞ。

「いい年した中学生が、お別れとか言うのおかしいかもしれないけど…や、なんか…ちょっと、寂しい?みたいな。だから、せめて、永遠の住んでる場所とかだけでも教えて欲しい…とかいうのは、迷惑かな?」

一気に伝えると、永遠の顔がくすっと笑つた。

なんとなく、久々に見る永遠の笑顔。
可愛いなあと反射で思つてしまい、そう思つてしまつた自分を打ち消す。

いやいやいや、永遠は小学生だし。
うん、これは、妹みたいだという気持ちの現れだな。

永遠が床に指をつける。

そこで永遠が書いたのは、「ニニ」だった。

……？

何だ、ニニって。

ここ……つまり時計塔……？

……それはあり得ない。

この時計塔には人は住んでいないはずだ。

時計の調節をしにくる人は居ても、さすがに住んではいないだろ
う。

ホームレス達も、さすがに時計塔で寝泊まりはしていない。
エアコンも食料も何もないからな。

「……って、冗談か？」

永遠が悲しげな表情で首を左右に振った。

「冗談じゃ……ない……？」

どうということだ。

意味が全く分からぬ。

俺が戸惑つていると、永遠がすくっと立ち上がつた。

まだ……。

俺は既に、タイムトラベルと分かつた次第、永遠に素直に着いて

いくことにしていた。

もう無駄に抗つたりはしない。
体力がもつたいたいんだ。

でも、今日は別だ。

「おい永遠。待て」

俺が素直に、自分に着いてくると思っていたらじい永遠は、驚いた表情で俺を見つめる。

目が点、とはこのことか。

「最後だろ、この五分間は。それなら、もうタイムトラベルしたって意味がないんじゃないかな」

そう言つて、俺は永遠の反応を伺つ。
永遠を困らせたくはなかつたが、最後くらい俺の我が儘を聞いて
もらえないだろうか。

さて、永遠の反応は

……え、

「ちよつ、何で泣いてるん、だよつー」

驚いた。

まさか、泣くとは。

永遠が焦るだろとは予想していたが……ここまでとは。
というか、これは……俺が泣かせた……？

「あああっ、俺こじりつるといつ、」

女に泣かれたことなどない。

そもそも俺は女と関わったこと自体少ないのに。
そんな俺に何を求めているんだ…！？

「……シ、たく、！」

仕方なく俺は永遠の頭に手を置いて、ぶつ叩いた。

パシーンッといういい音がする。

もちろん本氣で力いっぱい叩いた訳じやないが。

永遠の涙がぴたつと止まり、俺を田を見開きながら見つめる。
…しぐじつた、か？

…永遠だつて、俺が落ち込んでいたとき回し蹴りしたじやないか。
そのお返しだ、そうだ！

…あ、でも、永遠は2度田は頭撫でてくれたような…？

「……今日はそっちかよ」

殴る方じやなくて撫でる方だつたのな。

そう思つて、俺は改めて、永遠の頭を撫でた。

サラサラの髪に指を通す。

永遠の耳が真つ赤になつた。

「…どうでもいいけど、泣くのは止めてくれ。対応に困るし……、

永遠が泣くの、嫌だ」

最後はまるで駄々をこねたような形になってしまった。

でも、永遠には笑つてて欲しいんだよ。

あざけ笑つたり、花が開くように笑つたりしてた方が断然可愛い。

「つて、まあ、俺の我が儘だけどな！」

恥ずかしさを誤魔化すために笑う。

すると、永遠もほんのりと頬を染めながら笑つてくれた。

そのときだ 、強い突風が吹いたのは。

今までのときと同じだ。

ただし、今回は状況が違う。

今まで落としていたときに突風が吹いていた。
つまり、俺達は屋外に居たという訳だ。

だが今回は、屋内に居る。

時計塔の中に、だ。

時計塔は意外と頑丈で、そこまでもろくない。

だから、俺達は吹き飛ばされなかつた。

足下は多少ぐらつくが、時計塔のおかげで、風の影響も少なくなつていて。

しかし、突風が去つたあとにやつてきたのは、風よりも恐ろしい

沈黙。

「あの… も、永遠… ??」

もう、永遠の目に涙は見えなかつた。

だが、その代わりとして永遠が俺を強く睨んできたが。

なかなかに迫力がある。

「 さういふら、五分、経つたかなーなんて、 まほま、 まほつ 」

時計塔に響く俺の乾いた声。

そのとき、俺の声にかぶせるよつこ、 もつーつ声がからんできた。

「 つかじやないの…」

かぼそい声。

聞き覚えのない声に、俺は首をかしげた。

顔をあげると、永遠が口を開いている。

…え。

あんぐじと口を開く俺。

だつて。

だつてさつきまで、永遠は何も…何も喋らなかつた、のこ。

そんなどは、…

「 馬鹿じやないの。せつかく死なずに済んだのこ。 そのチャンスを自ら手放すなんて、ホント、馬鹿じやんアンタ」

俺のことを見てせせら笑う永遠。

その口からは、俺の知つている永遠とはかけ離れた罵倒が飛び出していく。

「 ちよつと、わーたーるーくーん。なになこ、驚こちやつて声も出ませんみたいな? やだ、航君つてあたしのこと好きだつたの? 」

その言葉に、俺はようやく意識を取り戻した。

やば、俺、完全に行っちゃってたよ、意識が飛んでた。

「違つ、…別に俺は、そんなんぢや…。ていうかお前、喋れたのか？」

「うんまあね。でもあたし、口を開くと暴言ばっかっしょ？だから口閉じてたの。アンタを騙すためには可憐な乙女の路線でいくしかないかなって思つてさ」

信じられない。

こいつが、永遠か？

違うだろ。

俺の知つてる永遠は、いつも無表情で、何を考えてるのかさっぱり分かんなくて、いきなり回し蹴りしてたり、いきなり頭撫でたり、…いきなり、すげえ可愛く笑つたり。

そういう、よく分かんないけどおもしろい奴で。弱音とかマイナス思考とか大嫌いで、いつでも前向いてて。

そんでこつも…、俺のこと、考えてくれて。

ずっと無表情なのに、急にあざ笑つたり、微笑んだり、はにかんだり。

そういうときの笑顔がすげえ可愛くて、なんか…多分俺、

結構永遠のこと、好きだつた。

始めて自覚した。

俺、永遠に恋してるんだつて。
認めたくなかつたけど。

でも、今の永遠は、永遠じゃない。

「永遠。田覚ませよ。何言つてんだよ、永遠。起きろよ
「はあ？ アンタの方が何言つてんの、なんだけど。超意味わかんな
ーい」

一瞬、永遠の目が見開いた。

といふことは、やはり俺の勘は正しこうづわけか。

「お前、永遠じゃないだろ
「はつ…、ちよ、やだ、ホントに意味わかんないんですけど。アン
タ何が言いたいワケ？」

急に永遠の目がクールダ・ウンする。
よし。

若干怒つてこるとこづいとま、凶星とこづいとだ。

「本物を出せつて言つてる。いのくらに分からぬの？ てめえ、永遠の真似するならもつと上手くやれよな。言つとくけど、永遠はもつと頭いこせ」

永遠がやつたみたいに。

上手く笑え、俺。

俺はしつかりと、偽物の永遠を見つめて、右口角を少しあげた。

上手く“あざ笑えた”だろうか？

「つ……、あたしを、馬鹿にしてるのー？」

頬をカツと赤くして偽物が俺に噛みつぶ。

「馬鹿になんかしてない。眞実を言つたまで、」

「みんなそう言つんだ！あたしよりも永遠の方がいいって。みんな
そうやって、あたしを捨てていくんだ…！あの人もそうだった…古
いあたしよりも新しい永遠を選んだ。あたしだって頑張ったのに。
あたしだって、風を司ろうと必死で頑張ったのに。なのに、なんで
あたしだって、風を司るとか。なのに、なんで

！」

いきなり偽物が泣きながらわめいた。

はあ？

どういうことだ。

意味が分からぬ。

永遠の方がいいとか、あたしだって頑張ったとか。

風を司るとか。

「どういふことだよ

「あたしと永遠は、風を司る精靈で…、最初は、あたしが風の管理
をしていたの。でも、失敗しちゃって…。そのときから、あの人は
永遠を“風見鶏”に選んだ。あたしよりも優秀な永遠を

精靈？

管理？

風見鶏？

なんだそりや。

ついに頭がおかしくなったか。

「意味わかんねえんだけど」

「だから、あたしはおちこぼれで、永遠は優秀だつてことよ。あた

しは、永遠に復讐がしたかった。それで「いつして、永遠になつすま
してる」

なりすましてる。

いつの間に？

さつきまでは、永遠だつた。

でも今は永遠じやない。

いつ入れ替わつたんだ？

そのとき、俺は肝心なことを思いだした。

“もう、五分経つてる”。

「お、おい偽物…世界は…世界はなんで滅んでねえんだよ…？」
「偽物つて言わないでよ…」つて、あれ…おかしいわね…、…ま
さかつ、」

サツと偽物の顔が青ざめる。
偽物の肩がぶるぶると震えだした。

「お、おい…おい偽物、聞こえてんのか！？」
「まさか…まさか、まさか…」。…もしかしたら…、空間が歪み始
めてる…？」

くつかんがゆがむ。

これ以上何を言われても驚かないと思つていて、やつぱり驚く。
嘘だろ…？

“うなつてんだよ、一体。

「どうこういじだよ」

「だから、あたしが永遠を…乗つ取つて…そしたら…空間が歪んで

「意味、わかんねえ」

…待てよ。

よく考えろ、俺。

確か、まだ永遠が永遠だったとき、タイムトラベルする前に何かを叫んでいたよな。

あれは…なんて叫んでいたんだ？

永遠の口元を思い出す。

最初の口の形は「い」行の口、次は「え」行、最後も「え」行。つなぎ合わせると、「いええ」。

いええ…いや、これに子音を組み合わせなけば。

…、「上げて」！？

逃げてつてことは、永遠は何かに追いかけられていて、俺を逃がしたかつたってことだよな。

何かに追いかけられていた…その何かつて…まさか、この偽物か？永遠はタイムトラベルする直前に、ハツと思いだしたような感じで叫んでいた。

ということは、偽物が永遠と入れ替わるタイミングは、タイムトラベルする直前。

永遠は連れようとしていたんだ。

それを俺が、タイムトラベルしたくない、なんて言つたから…。

「どおじょう…あたしじゃ、無理だ…この空間を直すには…永遠の力が…！」

…そんなの、自己中心的すぎる。

勝手に永遠を乗つ取つて、勝手に泣いて、勝手に永遠に助けを求めて。

それを許せる程、俺は寛大じやない。

「てめえ！何勝手なこと言つてんだよ…！そもそもはお前のせいだろ…？こうなつたからには仕方ない、だから諦めよう…そんなことを俺は望んでない！地球が滅ぶのは運命だから仕方ない、でもな、空間が歪んだとかいうのは全部お前の責任だろ？…こうなつたからには仕方がない、そりやそうだ、でもな、仕方がないからって諦めていいなんてことはないんだよ！」

そこだよ。

偽物と永遠との決定的な違い。

永遠は、諦めることを知らないんだ。
だがこいつは、諦めて人に頼るということしか知らない。
こんなのが永遠に勝てる訳ないんだ。

「わた…る、くん…」

「てめえにわたるくんなんて呼ばれたくねえー俺が自分の名前を呼んでほしいのは、たつた一人」

そこで俺は大きく息を吸つた。

「永遠だけなんだよ…！」

「永遠だけなんだよ……」

俺がそう言つた瞬間、偽物の体がパーンッとはじき飛ばされた。
別に俺がはじき飛ばした訳じゃない。
そんな器用なことができるはずがない。

偽物は、勝手にはじき飛ばされたのだ。

あり得ない。

確かにそうだが、ここまで来ると何でもありに思えてくるから不思議だ。

「おい偽物！？」

慌てて近寄ると、偽物はむくつと起きあがつた。
そして、俺を見て、ぱっと顔を輝かせる。
あれ……この笑顔は……。

鼓動が波打つ。

急に顔が熱くなる。

ああ、この子は……この子は、本物の……、永遠だ。

「永遠……」

良かった。

言葉が喋れなくて、ほとんど無表情でも、やつぱり俺は、永遠がいい。

永遠は、俺の様子を見て、くすりと笑った。
だが次の瞬間には、思い詰めた表情になり、外の様子を見つめる。

「なあ永遠。偽物は…、どこの？」

永遠が床に指をつけて、流れるような仕草で文字を書く。

「居ない。元の場所に帰った。ワタル君のおかげ」　俺の名前の漢字が分からなかつたのだろう。

永遠は少し悩んでから、カタカナで俺の名前を書いた。

「俺のおかげ…か。いいことをしたつて訳じやないんだうつけど、まあいつか」

そう言つと、永遠はふるふると首を振る。

良くないってことか？
え…俺、どうすれば…。

すると、永遠がまた床に指をつける。

「ワタル君悪くない。悪いのは私。」「めん」と、永遠の指が文字を書く。

だんだん永遠の字も読み慣れてきた。
慣れると簡単だな、意外と。

「永遠のせいじやないよ。謝らなくていい

そう言つて俺が笑うと、永遠も困ったように笑った。

そして、「私止める」と書いた。

……え?

「ちょっとおー、と、永遠ーー?」

俺が永遠に手をのばす。

その手を振り払つて、永遠はゆっくりと、展望台に向かつて歩き出した。

行かないでくれ。

そんなことをつい思つてしまつたのは、俺が自分の気持ちに気がついてしまつたからだ。

かと言つて、そのことを後悔する訳では決してない。

永遠に生きつと、この痛みとやらを止めることができるのだろう。

それは俺にも分かる。

でもきっとそれは、容易いことではないはずだ。
もしかしたら……永遠の命を削つてまでの仕事かもしれない。

そんなのは嫌だ。

俺を助けるために、とか。
世界を救うために、とか。

そういうのはいらない。

俺はただ、側に居たいだけ。

そんな俺の心を無視して、永遠は展望台の硝子に手をかけた。
すると、硝子がいい音をして割れる。

うおつー?

そうか……この能力で硝子を割つたり階段の手すりを壊したりして

たのか…。

まさか、偽物をふつ飛ばしたのもこの能力！？

そのとき、永遠が、こちらを向いた。
と…わ…？

かすかに微笑む永遠。

強い風が、時計塔の中に入り込んでくる。

俺は吹き飛ばされそうになりつつも、なんとか踏ん張つて、永遠の目を見た。

なあ。

お前のことが好きだと言つたら、お前は笑うか？
好きになるつもりなんてなかつたし、そもそもそんな可能性など
考えてさえいなかつた。

永遠。

俺、本気なんだと思つ。

だから行くな。

俺、そばに居るから。

だから行くな。

永遠の口が開く。

俺の目がそれに吸い付けられた。

永遠の口がそう語る。

『だいすき』

一瞬俺は睡然として、それからハツと意識を取り戻した。

…俺は言えなかつたのに。

どうしてお前は、簡単にその言葉を口に出せるんだ。
自分が本当に情けない。

「永遠 ッツツ…！」

永遠が、軽く一步踏み出す。

そして、空間の歪みに、巻き込まれるようにして外へと飛び出していく。

次の瞬間には、日映い光が辺りを包み、そして俺は、叫んだ。
腹の底から。

心の中を。

叫び尽くす。

「行くな ッツ…！」

その声は途中で途切れる。

…サヨナラも言えない恋もある。

ありがとうも言えない恋もある。

自分の気持ちを、素直に言えなかつた恋だつてある。

またいつか。

そう心中で思いながら、俺の意識は遠ざかつていった。

「おーい航ーっ

「んあ？」

「よつす。なんだよ、朝から寝ぼけちゃって。お寝坊さんだな！」

「うぜー。朝からテンション高すぎだろお前。俺の前から失せろ」

「ひどいーひどいわ航君、俺と君との仲じゅないかー！」

「お前と俺とはなんの仲でもない。ただの他人だ」

朝から絡んでくる友人を適当にかわしながら、俺は一つため息をもらした。

気づけば、朝だつたのだ。

何もなかつたというふうに朝日は昇ついていて。
何もなかつたというふうに一日が始まつていて。
まるで、あの“五分間”がなかつたよくな。

あれが夢だと思ったら、どれだけ良かつたことだらうか。
だけどそうではない。

俺、永遠のこと、好きだ。

忘れられないつづーの、あの笑顔。

「おーい、生きてるか、航

「生きてるよ、当たり前だろ」

「だつて死んでるみてーだし。なんかあつた？」

「別に? お前に言つたつて、何も……何も、変わらないんだよ

そう。

これはコイツに相談したつて何も変わらない。

それだけじゃなく、コイツ以外の誰に話したつて、何も変わらないのだ。

俺を救えるのは、永遠だけなのに。

それなのにあいつはここに居ない。

世界を救うよりも、俺がそばに居たかった。

空間の歪みを直すよりも。

…永遠の馬鹿野郎は、空間の歪みを直すと同時に、世界まで藻を救つてしまつたらしい。

偽物が言つていた、風？を伺つたか何かしたんだろうな。
俺がタイムトラベルしたのも永遠のおかげだろう。
タイムトラベルさせるために屋外へと連れ出したのは、時計塔の中では風が吹かないから。

もうこいつはだらう。

「あんたよ。今日の航つてば、『機嫌ナナメ、なのな
「そうだよ、何か悪いか
「逆ギレかよーもついい、俺、他の奴と学校行く…じゃーな、航君
！」
「おーひ。またなー友よ」
「…………あのさつ、ー」

走り出した瞬間、こいつを振り向く阿呆。

…あんな、自分から先に行くとか言つておきながらせつぱつ一緒に
に、とか言つなよ。

いい年した男子が恥ずかしいだらうが。

「…何かあつたなら、俺にも相談しろよな、ばーか…」
「……」

…馬鹿はどつちだ、馬鹿。

でも、なんとなくいらいらした気分が少しだけ晴れた。

決してあの馬鹿のおかげではないけどな。

あいつが走り去つてから、俺は空を見上げた。

この世界に、永遠は居るのだろうか。

…居ないだろ？

…じやないどこの世界に…居るよな、きっと。

信じてる。

なんて簡単に言えない。

だって分かんねえじゃん。

俺には…永遠のこと…。

よく考えたら永遠の名字も、年齢も…何一つ知らないのだ、俺は。

「永遠…」

どこのに居るんだろうな、永遠は。

…あーくそ。

永遠が無事で生きていてくれればいい、そんな綺麗事は言わない。

頼むから帰つて来いよ。

帰つてきて俺の隣で笑え。

俺のこと、好きなら…行動で示せよ、つたぐ。

はあと一つため息をつき、俺は視線をずらし、時計塔を見上げた。

すると とあるものが田に飛び込んできた。

それは、…風見鶏。

前まではなかつたはずの風見鶏が、凛として、時計塔の上に立つて いるのだ。

風に揺られて、ゆらゆらと向きを変えながら。

自分の目が見開かれていくのが分かった。

ああ。

永遠。

お前、“風見鶏”なんだらう？

風を司るだけじゃなくて、きっとお前は…俺に、風の位置を教えてくれたんだらう？

気づけば、俺の足がかけ出していた。

授業なんて知るか。

今動かなくていつ動く。

あのとき伝えられなかつた想いを…今、

「永遠ッ、」

時計塔は高い。

階段しか上に上がる方法はない。

でも俺、行くから。

だから今度は、俺を置いて行くな。

待つてろ、なんて言つても待つていてくれないだらうから、俺、

急ぐよ。

お前のこと、捕まえるために、急ぐよ。

「俺ッ、」

喋れないことを気にせず、綺麗な字を書く永遠が好きだ。

まるで俺を見下しているかのような、少しいりりへ笑顔を見せる

永遠が好きだ。

たまに見せてくれる、心底幸せそうな笑顔の永遠が、好きだ。

「好きだから…」

階段を駆け上る。
頂上はまだ遠い。
でも息が切れてくる。
それでも俺は叫び続けた。

「だから俺っ

息が切れても、声が枯れても、叫ぶことをやめちゃ黙だ。
そこでやめたら終わってしまう。
だから俺は、やめない。

「追いかける、から…！」

追いかけたいんだ。

お前の背中。

意味わかんないことをやつてくれるし、意味わかんないことを言つてくれるけど。
けど…っていうか、だからこそ、追いかけたい。

「今度は、待つてみた…！」

最後の言葉を呟いた瞬間、俺の体が 浮いた。

風に乗つて。

「つおー…？」

俺の体が風に乗って、階段をどんどん上がる。
わ… わすが…。

超人技

つていうかやつぱり、人間じやないだろお前。
そう思いながらも、俺は笑いが止まらなかつた。

あーおかしい。
笑うしかないよ、ホント。

「永遠！」

雑に、時計塔の頂上へと放り出された。
「、腰打つたんですけど…。」

いつてえなあ。

そのとき、俺の目に飛び込んできたのは、正真正銘…本物の…、永遠だ。

永遠が笑う。

照れくせんう。

永遠が手をのはず。

संस्कृत विद्या

「待つてくれて、さんきゅ」

手を握りながら喋る。

永遠が目を泳がせた。

畜生、可愛いなあ全く。

「それと…、俺も、好きだよ」

この手を掴んだ。

時間の波にもまれても、俺はこの手を掴んだんだ。

宇宙は広い。

だから、俺が知らないこと、まだまだこいつぱにあるはずだ。

永遠のことだって、俺はまだ、何も知らない。

でもいいんだ。

これから、たくさん知つてこべから。

「追いつくまで、時間かかると思つナビ、

俺、馬鹿だから。

覚えるのに時間かかると思つ。

ごめんな。

でも

「待つててくれる…かな？」

永遠が待つててくれるなら、俺は頑張れるよ。

永遠は、びっくりしたような顔をして、そして、俺の好きなあの

永遠は、笑つた。

永遠にお前のこと、追い続けるか。

宇宙の果てまで。

だから待つてください。

いつか俺が、君を超える日まで

f
i
n
.

Scene - 6 (後書き)

や……やつと完結です……。

遅れてすいませんでした……！

それと……こんな、「準SF」みたいなものですいません……。
タイムトラベル……一応SFですよね……？違います？
サイエンスフィクションの意味を勘違いしていますか、私。
ヒイイそうだったら申し訳ないです。
ていうか、切ぎりぎりすぎで……ひよ。
焦った焦った

まあ。

今回初のお祭りは。

ちょっと失敗？に終わっちゃいましたが。
次は頑張ります……！（

で、おもしろいこと少しでも思つたら、読者投票、などなど……（）

よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3445v/>

刻の風見鶏

2011年9月4日13時44分発行